

● 資料紹介

### 錦絵「豊後鶴崎戦争」

豊後鶴崎（現大分市鶴崎）での西南戦争を描いた錦絵です。大山巖少将率いる官軍と、村田新八の妻伊尾ら女性たち（薩軍）との激しい戦いの様子が、紙面3枚にわたって描かれています。同地では、明治10年5月16日、駐留中の警視隊二個小隊（245名）を、鎌田推一を隊長とする西郷軍が襲撃するという事件が起きており、恐らくこの事件を題材に描かれたものとみられます。しかしながら、登場人物についてみれば、薩軍が女性ばかりであるなど、史実と

はかなり異なっています。それは、女性や相撲取り、大工・左官といった直接には関係ない人々を薩軍に参加させることで、当時の民衆の政府に対する不満や批判をも描き込んだとされる、作画の意図に因るものです。県下の西南戦争に関する絵としては、中津隊の大分県中津支庁襲撃事件を描いたものが知られているだけで、その数少ない資料の一つとして本錦絵は大変注目されます。

〈永島孟齋画 縦35.5×横71.5（3枚合）cm〉



● 行事案内

テーマ展示

■ 第2回 城下町を掘る

期 間 9年7月5日（土）～9月28日（日）  
内 容 府内城と城下町を新資料「正保城絵図」（模写）や最新の調査成果から展示・紹介します。

各種講座

■ ふるさと歴史再発見「考古のコース」

期 間 7月～9月の第1・2・3土曜日  
対 象 高校生以上  
内 容 考古学の調査・研究の最前線からの報告と成果を中心に、県内外の歴史を学んでいただきます。

● 編集後記

春は歓迎遠足や市内見学の季節で、当館もたくさんの子供達に利用してもらっています。時には説明業務でなくてご舞いになるほどで、うれしい限りです。そんな説明業務に当たっていた

ある日のこと、「おじちゃん」と私を呼ぶ子供の声。「う～ん、まだおじちゃんには、踝までしか浸ってないのだよ」と釈明したい、近況です。

資料館ニュース No.39

発行 1997.6.30

大分市歴史資料館

大分市大字国分960番地の1  
〒870 ☎ (0975) 49-0880



# 大分市 歴史資料館ニュース

OITA CITY MUSEUM NEWS



三佐・野坂神社の人形山車



## 三佐・野坂神社の春祭

大分市大字三佐では、春祭を例年4月28～29日に行っています。この祭りには地元を離れていた若者も帰郷して参加するといわれ、民俗の急激な変容や消滅が叫ばれる現在では、珍しい盛り上がりを見せています。祭では地区の氏神である野坂神社から、新港近くの御旅所まで御神幸が行われます。庄巻は御神幸と同時にされる山車の巡幸でしょう。山車は、太鼓を乗せた曳き山車や、御輿型の飾りをつけた担ぎ山車、美しく飾りつけられた人形山車があり、三佐10地区の青年によって巡幸されます。なかでも6基の人形山車は、歌舞伎などから題材を取った凝った人形飾りが山車全体に施され、お互い華やかさを競い合っているようです。

このような山車が巡幸する祭りといえば、京都の八坂神社の祇園祭が全国的に有名でしょう。一般に祇園祭は、人々に祟りをなす疫神や御霊を鎮めるため、疫病などが蔓延しやすい夏に行われ、都市で発達した都市型祭礼の性格が強いのが特徴です。山車は神霊を移動させる為の依代に、中世の風流など芸能の影響によって様々な意匠が加えられ、現在のような形に発展したものだと考えられています。野坂神社の山車は、京都の祇園祭が伝来したものともいわれていますが、山車の形態の違いから異論もあり、正確なことは分かっていません。しかし、明治30年に大分県下の神社の活動について行われた調査『神社慣例』という資料には、野坂神社の屋台・飾山の出る祭りが6月に行われていた様子がうかがえます。このことから野坂神社の山車の巡幸も、京都の祇園祭との直接的な関係はさておき、元々は祇園祭のような夏祭りとしての性格をもつものだったのかも知れません。

※写真上から

○三佐・野坂神社

○山車に飾り付けられている人形。

○山車と共に出る獅子。参拝者の頭を噛む。同様の行事が、大分市数戸や田原で夏載いとして行われている。

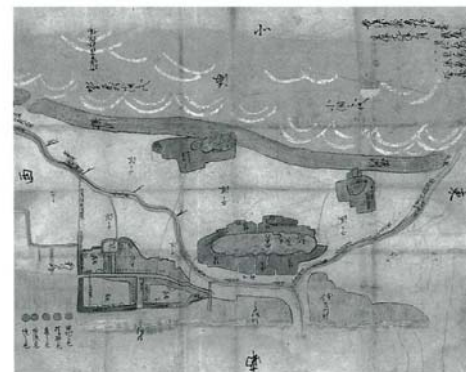


## 「館蔵古絵図展」

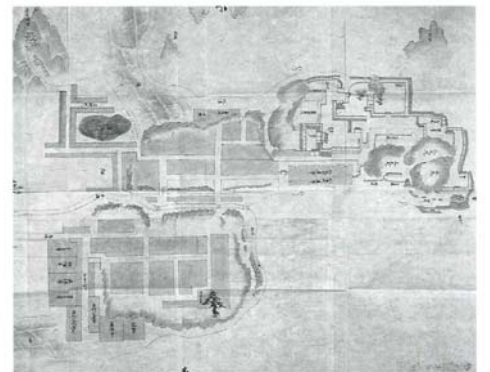
会期 4月26日～6月29日

本年度の第1回のテーマ展示として「館蔵古絵図展」を開催しました。本展では、藩領図・城絵図・村絵図・地籍図などの郷土大分に関わりのある古絵図、20点余を展示し、歴史とともに変貌していく地域の景観や昔の人々の生活に思いをはせていただきました。展示品の中には、今回初めて公開した絵図もあり、ここでは、このうち2点ほど紹介してみたいと思います。

**大分郡原村絵図** 享保10(1725)年の年号をもつ絵図で、村や田地、畑・道・塩浜・村塚などが色分けされて描かれており、当時の村の領域や土地利用の状況が一目でわかります。別府湾に面した江戸時代の原村では、小物成に「塩浜定御運上」・「塩浜不定御運上」などの年貢が納められていました。「向原村」・「妙見宮」・「住吉宮」の周囲に広がる塩浜は、こうした原村の盛んな製塩業の有様を伝えています。また同村は、大分・直入郡の幕府領の村々から集められた年貢米を一時保管する浜蔵や、その年貢米を積み出すための港が置かれていたことでも知られています。絵図では「御城米御蔵場」・「船入」としてその場所が示されており、「船入」までは川筋から運河らしきものが開削されていたことも



大分郡原村絵図



豊後国木付之城図

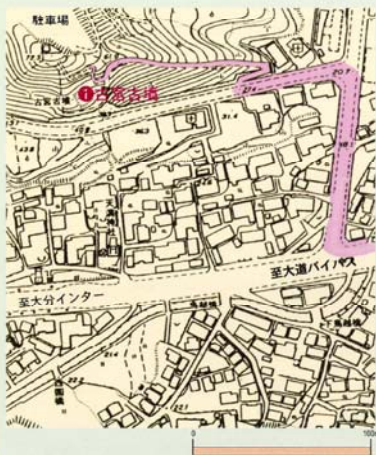
分かります。また河口沖合には「御城米御船積場」と記されており、集められた年貢米は、恐らく「船入」からこの船積場まで小舟で搬送され、そこから千石船などの大型船に積み替えて輸送されたものとみられます。絵図の記された享保10年、隣村の高松村との間で漁業権をめぐる争いが起きており、本絵図作成の背景にはこの事件との関連が考えられます。**豊後国木付之城図** 本図は、城の「大手口」西北に屋敷をもつ高畑勘解由や西脇藤左衛門(両名は小笠原忠知の家老)の名前から、小笠原時代(1632～1645年)の杵築城下を描いたものとみられます。後の能見松平氏の城下と比べると、寺町は「本立寺町」、魚町は「きふね町」とあり、寺町の寺院も、北から南へ「本立寺」・「妙徳寺」・「安住寺」・「峯高寺」の四カ寺(松平時代では、「養徳寺」・「正覚寺」・「妙徳寺」・「安住寺」・「長昌寺」の五カ寺)が並ぶなど、異なります。現在につづく城下は、一般に、小笠原時代に築城が始まり、その跡に入った松平英親によって町づくりが進められ、延宝～元禄年間(1673～1703年)にはほぼ完成をみたと考えられています。本図は、こうした杵築城下形成の歴史を考える上で大変興味深い内容のものとみられます。



### 1 古宮古墳



大分インターに向かうアクセス道路右手の丘陵地にある終末期方墳。昭和56年、古墳の後背地の住宅地建設に伴う発掘調査の結果、九州では初めての石棺式石室墳であることがわかった。この種の古墳は、646年の薄葬令（古墳築造の禁止令）以後のものであり、貴族や、高級官僚の中のごく限られた者だけが造りえたものとされる。被葬者は「日本書紀」天武天皇の条に「壬申の乱」で活躍したことが記されている大分の君一族の「恵尺」の墓であろうとされている。



大道旧道から丸山墓地公園に入る急な坂道を登りつめると右手に社が見える。青島神社は府内城下桜町（現在中央町二丁目近辺）の商人で、府内藩に初めて畳表の原料である七島藁をもたらした橋本五郎左衛門を祀っている。明治14年、彼の功績をたたえ、生石の杵原八幡宮御旅所内に建立されたが、明治23年現在地に移された。彼が苦難の木、寛文3年(1663)にもたらした七島藁は畳表（七島表・豊後表ともいう）に加工され豊後地方を代表する特産物となり、府内周辺諸藩の財政に大きなウェイトを占めた。

### 2 青島神社



### 3 弘法穴古墳



現在、市内永興加茂団地の小さな公園の南側崖下にある横穴式石室墳（石室を構築し墳丘を盛った小円墳）。昭和30年に刊行された大分市史によると、直径約13m、高さ約5mの円墳であったが、今はその面影はない。古墳時代後期（6世紀～7世紀）のものとなっている。

市内永興3に現存する寺は、かつては釈迦堂であった。昭和24年に永興寺と改め、天台宗より真宗に転じ現在に至っている。旧永興寺の開基は天平年間にさかのぼり、当地一帯に広大な寺域を占めていた。付近から奈良時代の瓦が発見されており、鎌倉時代の「弘安園田帳」にも、「永興国分寺二十三町八段内、十三町八段永興寺、十町国分寺」と記されていることから往時を偲ぶことができる。

## 歴史の散歩道(3)

# 古宮古墳から堀切峠を越えて



### 2 青島神社

慶長年間（1596～1615）府内藩主竹中重利が府内と日田方面、直入方面を結ぶために開いたとされている。開削された当時は「雨の日は重荷の牛馬が骨折する」と言われるくらい難所であつたらしく、後世、位置をすこし西側にずらせ、掘り下げを行っている。昭和30年4月7日に大道トンネル（西側）が開通するまで大分市街地と南大分を結ぶ貴重な交通路であった。昭和25年の写真では、乗用車がやっと離合できる程の道幅で、左右は、その名のとおり、掘り下げられた崖が迫っていた。現在は左右の崖が広く削り取られ昔の面影はない。

### 4 永興寺 (浄土宗)



### 5 南太平寺横穴墓群(一部)



現在建築中の大分市美術館（仮称）南側傾斜地のミカン畑に東西約170mにわたり、現状で27基の横穴墓群が確認されている。副葬品等の出土が確認されていないため築造時期は明確でないが、古墳時代後期とされる。半数近くが内部を改変されているが、横穴墓の形態的特徴をよく示している。

### 6 伽藍石仏



大道トンネル南側を出てすぐ左側の山付きの道路が久大線と交わる地点から、上野丘に向かって小径を三分ほど歩くと、木漏れ日の中に磨崖仏が見られる。石仏は三カ所に並んだ横穴の中に彫られており、それぞれ風化や、欠損が目立つが、わずかに赤、黒、白などの彩色が施されていたことがうかがわれる。特に、光背部を彫りくぼめた中から仏身を厚く彫り出す手法は、鎌倉期以降、豊後独特のものとなっている。

「歴史の散歩(3)」は大道トンネルから約1.5kmの範囲にある史跡を選んでみました。古宮古墳から南を向いた眺望は、眼下に大分市内から大分インターに向かうアクセス道路があり、向かい側の丘陵地は左手、上野丘から庄ノ原へと連なっています。この位置から見ることはできませんが、この丘陵地の向こう側の大分川を望む台地や斜面には、久大線に沿って東側から、大臣塚、元町石仏、岩屋寺石仏、伽藍石仏、南太平寺横穴墓群、弘法穴古墳、蓬莱山古墳、丑殿古墳、餅田古墳群、千代丸古墳と約10kmにわたり大分の古代から中世にかけての史跡を見ることができます。



## 高崎城と市内の山城(2)

(続き) 前号の縄張り図1は、高崎山の山頂部にあり、築城当初の主郭であったろうという事は前回述べた通りです。主郭は、平地の居館の形をそのまま山頂に造ろうとした痕跡があります。中世の平地の居館は、上野の大友氏居館に見られる様に方形を基本としています(古墳時代にも方形居館がありますが中世とのつながりについては良く判っていません)。平地では方形の縄張は容易ですが、狭い山頂部ではある程度の面積を取ろうとすれば、地形に沿って歪んでしまいます。しかし、それでは方形の基本が崩れてしまいます。そこで、せめて正面だけは方形に見える様にと、主郭東半分だけを方形にしている事がわかります。主郭の防衛ラインは正面A-Bの堀切、搦手は西側の堀切となります。

高崎城の縄張は一つの特徴を持っています。多くの山城は主郭から各郭は重層的に造られ、基本的には下から上へ、または横移動は各郭を経由する例が多く見られます(高崎城でいえばCより東側の様な縄張)。高崎城の場合各郭が、郭2から10へ徐々に低くなって連なっていますが、隣接した郭相互の出入り口はありません。それに代って、各郭の南側を走る横堀状の道からそれぞれ各郭に入る構造になっています。これは、各郭に陣を張る各武将の独立性を思わせる縄張といえます。大友氏が最後まで戦国大名として脱皮できなかったのは、その家臣団構成に問題があったと考えられ、この縄張はそれを表しているのかも知れません。

宣教師フロイスの記録には、島津氏の侵攻に備えて「ウエノハルと称する場所に一城を築く」と書かれていますが、高崎城の改修については触れられていません。しかし改修のあった事は明らかで、虎口部の石垣化とその構造、南東斜面に残る畝状堅堀等に痕跡を残しています。畝状堅堀は敵兵の横移動を防ぐ為の堀で、天正頃九州にも拡がっています。主郭1に一部改修の跡は認められますが、主な改修は

郭2を中心に行なわれ、そこを主郭化したと思われる。石垣で固め複郭化し、入口も平入りではなくカギ形をなしています、城へは麓の城の腰からジグザクの道を登り大手に至ります(現在は新しい道のため旧道は寸断され利用出来ません)。登りきった所の左右に石積がわずかに残っていますが、虎口(入口)の跡です。入ると若干広くなって勢溜をつくります。そこから道は左右に分かれます。左に横堀状の道を行くと右手に各郭を見ながら主郭に至ります。右手に向かうと鍵の手を経てC郭に入ります。Cは石垣に囲まれ東北隅に入口の切目があり、さらに北側の登り石垣に繋がります。AやDも登り石垣の一種といえます。

さて、この様な高崎城は実際に使用されたのでしょうか。天正14年(1586)島津軍侵攻で、戸次河原合戦に大敗し、大友義統は一度高崎城に入るが直ぐ城を捨てて豊前竜王城まで敗走しました。高崎城は中に立籠もれば、島津軍でも落城させることは不可能に近かった筈です。豊臣秀吉が文禄2年(1593)に“文禄の役”での不始末で大友義統を除国した際に、その罪状の一つに高崎城を捨てて敗走した事をあげています。敗走した理由の大きな要因の一つに、高崎城の平常からの食料・武器弾薬備蓄が足りなかった事があると思われる。逃げ城としての山城は平常からの備蓄が要であることは云うまでもありません。その後の府内(豊後国)は人口がかなり減ったとされています。その一番の理由は、島津による住民の人質としての連行にあった事が、宣教師の記録などから推定されています。一部は奴隷としてポルトガル人に売られ東南アジア方面に連れて行かれた様です。戦国時代の住民は単なる傍観者ではいらなかったわけです。

※高崎城の縄張り図は前号(1)を参照して下さい。

## 来館者アンケートのまとめ

当館では、よりよい館運営の参考とするため、来館者にアンケート調査をお願いしています。今回は4・5月のアンケート結果を報告します。

調査は、入館時にアンケート用紙を館のパンフレットと一緒に渡し、観覧後記入して回収箱に入れる方法で行なっています。質問項目は(1)性別、(2)世代、(3)居住地、(4)情報源、(5)交通手段、(6)展示内容・方法への意見、(7)今後の展覧会の希望の7項目です。

この2ヵ月の入館者総数は4438名、内訳は第1表のようになっています。アンケート回答者は215名。小学生の団体には用紙を配布していませんので、実質回答率は8.5%になります。詳細は第2表にまとめました。特筆すべきは、資料館での催しを何で知ったかという情報源に関する質問で、「人から聞いた」いわゆる口コミが最も多い点です。このことは展示や活動に関する来館者の評価がその後の来館者数に影響を与えているわけですから、展示内容をより一層充実させていかなければならないと言えます。

資料館に対する意見では、「たいへん良い」「わかりやすかった」という意見の一方、改善を求められる意見もありました。その中で、一番多かったのは

「照明が暗くて見づらい」「解説の文字が小さくて読めない」の2つです。この苦言は当館に限らず、展示する側と見る側で最も調整しづらい点と言えるでしょう。まずは、照明が暗いことへの理解を求め説明板を増やす必要があるようです。その他、「館内順路が不明瞭」「資料館までの道順がわかりづらい」といった意見もありました。今後の展覧会の希望では「仏教美術展」「大分ゆかりの人物展」「刀剣展」の他、「明治～戦前までの大分を紹介する展示」が数例あり、より身近な歴史を紹介する展示への要望が根強いようです。

さて、団体で来館した小学生にはできるだけクラスごとに説明者をつけています。中にはお礼の感想文を送ってくれる学校があります。資料館を見学して感じた気持ちを素直に綴った文章を読むと、元気づけられると同時に義務教育の中で資料館が果たすべき役割の大きさを感じます。

アンケートに寄せられた一般入館者からのご意見と小学生からの感想文を財産、糧とし、今後さらに親しみやすく、多くの方に利用していただける資料館を目指したいと思います。

第1表 4・5月の入館者 単位:人

	大人	中高生	小学生	計
一般	1031 (23.3)	63 (1.4)	474 (10.7)	1568
団体	420 (9.4)	542 (12.2)	1908 (43.0)	2870
計	1451 (32.7)	605 (13.6)	2382 (53.7)	4438

(註) ( )内は%

第2表 アンケート結果 単位:人

(1)性別	(2)世代	(4)情報源	(5)交通手段
男	10代	市報	徒歩
女	20代	新聞	自転車
不明	30代	テレビ	バイク
	40代	ラジオ	自動車
	50代	チラシ	バス
	60代	情報誌	J R
市内	70代	人から	
県内	80以上	その他	
県外	不明		

註) (4)・(5)は複数回答のため総数が異なる。

### ご来館アンケート調査



本日は、ご観覧いただきましてありがとうございます。当館では、今後のよりよい館運営のためアンケート調査を行っております。ご協力くださいますようお願いいたします。

- 性別(男性・女性)
- 年齢(10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代以上)
- 居住地(市内・県内・県外)
- 大分市歴史資料館のことを何で知りましたか?  
(市報・新聞・テレビ・ラジオ・チラシ・情報誌・人から聞いた・その他)
- 資料館までの交通手段は?  
(徒歩・自転車・バイク・自動車・バス・JR)
- 当館展示の内容や展示方法についてどう思いましたか?
- 今後どのような展覧会を開いてほしいですか?

ご協力ありがとうございました。